

ネヘミヤ記5章「愛をもって仕える」

1A 貧しい者の虐げ 1-5

2A 重荷の担い 6-13

3A 仕える指導者 14-19

本文

ネヘミヤ記 5 章を開いてください。私たちは前回、城壁の工事がはかどっている時に、周辺の地方官僚が嫌がらせをし、工事をやめさせようとした話を読みました。けれども、ネヘミヤたちは武器を持ち、警護をしながら工事を進めます。けれども 5 章は、内部からの問題です。私たちはネヘミヤ記で、「神の民の守り固め」を学んでいますが、神がなされる事柄には必ず反対があり、悪魔と悪霊どもが、嘲りや落胆、恐れなどを植えつけて、何とかして私たちが前に進むのをやめさせようとしていることを見ました。けれども、それは外部からの攻撃です。今度は内部からの訴えであります。主の働きが進む時に、悪霊やサタンからの攻撃ではなく、私たちに互いに仕えるところの愛が欠如しているために、起こってくる葛藤があります。けれどもそれは、必ず起こることで、互いに愛にあって成長することによって克服が可能です。

1A 貧しい者の虐げ 1-5

1 さて、民とその妻たちから、同胞のユダヤ人たちに対して強い抗議の声があがった。2 ある者は、「私たちには息子や娘がいて、大人数だ。食べて生きるために穀物を手に入れなければならない」と言い、3 またある者は、「私たちの畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れなければならない。この飢饉に際して穀物を手に入れるために」と言った。4 またある者は言った。「私たちは、畑やぶどう畑に課された王の税金を支払うために、金を借りなければならなかった。5 現に、私たちの血肉は私たちの同胞の血肉と同じだし、私たちの子どもも彼らの子どもと同じだ。それなのに、今、私たちは息子や娘を奴隷に売らなければならない。実際、もう娘が奴隷にされている者もいる。ところが、私たちの畑もぶどう畑も他人の所有となっているので、私たちにはどうする力もない。」

「強い抗議の声」という言葉が使われています。これは、イスラエルがエジプトで奴隷として働かされている時、叫んだあの声と同じ言葉が使われています。主がモーセに、「3:7【主】は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。」と言われました。このような奴隷状態に、なんと同胞のユダヤ人がさせていたのです。

ここで気をつけなければいけないのは、城壁再建工事を行ったことによってこのような経済格差が生まれたということではありません。元々このような問題があったけれども、城壁再建工事によ

って浮き彫りにされたと言ったほうが良いです。主が、ご自分の民の間で事を行われる時に、聖なる御霊が働かれるので、肉の行いをそのままにさせることはありません。世においては、当たり前のように行われていることでも、神の共同体では違います。私たちは世から聖別を受けた者たちです。全く異なる原理で生きるように召されています。けれども、この世での生き方、この世での価値観で神の共同体に留まると、神はそれを肉の醜さとして露わにしてあぶり出されるのです。

抗議には、三つの事がありました。一つ目の抗議は、大きな所帯を抱えていた人々です。家族全員の食糧を得ることができないというものでした。二つ目の抗議は飢饉が起こったことです。それによって、食糧を得るために自分の畑や家を抵当に入れなければいけませんでした。ですから、二つ目の人々のほうが、一つ目の人々より窮乏しています。けれども、最悪なのは三つ目の人々です。ペルシアの王に対して支払う税金のために、負債を抱えました。けれども、返済できません。土地や家は売却してしまったので、そこからお金を捻出することができません。それで、何と自分の息子と娘を異邦人に身売りしなければいけなかったのです。

ここで富んでいる人々は何をしていたかと言いますと、食糧を得ることのできない大所帯の人々には、何ら助けの手を伸ばしませんでした。普通にお金を貸していましたが、普通に利息をつけて貸していました。そして、抵当に畑や家を入れていた人々にも同じようにお金を貸してました。さらに、奴隷として異邦人に身売りに出たユダヤ人については、その異邦人に彼らを買って利益を上げていました。一般社会的には、あり得ることでした。当時の社会状況では当たり前でした。しかし、神の民の間では絶対にあってはならないことでした。モーセの律法でこのことが起こらないよう厳に戒めていた、まさにそのことを行ないました。レビ記 25 章に、土地を手放さなければいけない人のためには、買い戻さないといけないと命じられています。「25:25 もしあなたの兄弟が落ちぶれて、その所有地を売ったときは、買い戻しの権利のある近親者が来て、兄弟の売ったものを買戻さなければならぬ。」そして、身売りした者については近親者が買い戻す権利があることを教えています。「レビ 25:48-49 身を売った後でも、その人には買い戻される権利がある。彼の兄弟の一人が彼を買戻すことができる。または、その人のおじや、おじの息子が買い戻すこともできる。または、一族の近親者の一人が買い戻すこともできる。あるいは、もし暮らし向きが良くなれば、自分で自分自身を買戻すこともできる。」

私たちがキリストのものとなった時に、私たちはキリストを互いに分かち合うようになりました。教会というのは、キリストを分かち合い、それぞれがその御体の一部になっている存在です。キリストによって救われた、そして天の御国に入るという喜びを個人のものにしてるのは、真理ですが、神のご計画は個人的救いだけではなかったのです。「ヨハ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」父と子が一つであるように、それぞれ一体にさせられた者たちが互いに一体になるというの

が、キリストが父なる神に祈られたことです。それによって、世に対してイエスが神からの方であることを知るようになります。

したがって、しなければいけないことは「共有」することです。持っている者が持たない者に分け与えることです。そして持たない者が売ってしまった土地や家を買戻してあげることです。そして、奴隷に売られてしまった者たちは、何としてでも緊急に買戻すことです。そして、負債は帳消しにします。このようにして初めて、イスラエルの民はエジプトで味わった苦しみを二度と味わうことなく、神の所有の民、自由人となることができます。

初代教会にも、似たような問題が生じました。初めはユダヤ人たちの集まりでしたが、その中にギリシア語を話すユダヤ人とヘブル語を話すユダヤ人の、それぞれのやもめへの配給に不公平が生じているということでした。それで、使徒たちが聖霊からの知恵によって、七人の執事を任命します。「使 6:1-6 そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。2 そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、4 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」5 この提案を一同はみな喜んで受け入れた。そして彼らは、信仰と聖霊に満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、そしてアンティオキアの改宗者ニコラオを選び、6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。使徒たちは祈って、彼らの上に手を置いた。」

ですから、キリストの体の中にも「自分」というものは存在しません。あるのは、頭なるキリスト、そして他者への労りです。そのことによって、体全体が健康に機能します。ですから私たちは、そろそろ「交わり」という定義を変えねばなりません。それは、受ける交わりではなく、与える交わりです。キリストによって受ける者はその恵みを他者に分かち合う、つまり与えることによって自分自身がキリストの恵みにあずかれます。人に仕え、人を愛することによってキリストの愛を知ります。確かに、キリストの愛を知らなければ人を愛することはできません。けれども、キリストの愛に留まる者は自分を捨て、自分を忘れ、他者を愛さざるを得なくなり、そして愛しているからこそキリストが自分を愛しているという確信を保つことができるのです。これが交わりです。

使徒パウロによる、次の言葉を私たちは守ることによって、ネヘミヤの時のユダヤ人共同体にあったような不一致と内部分裂を避けることができます。「ロマ 15:1-3 私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではありません。2 私たちは一人ひとり、霊的な成長のため、益となることを図って隣人を喜ばせるべきです。3 キリストもご自分を喜ばせることはなさいませんでした。むしろ、「あなたを嘲る者たちの嘲りが、わたしに降りかかった」と

書いてあるとおりです。」そして、この後に私たちは同じ思いを持ち、心をついにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえることができる、と言っています。

2A 重荷の担い 6-13

6 私は彼らの抗議と、これらのことばを聞いて、激しく腹を立てた。7 私は十分考えたうえで、有力者たちや代表者たちを非難して言った。「あなたがたはみな、自分の同胞たちに、利子をつけて金を貸している。」そして大集会を開いて彼らを責め、8 彼らに言った。「私たちは、異邦の民に売られた同胞のユダヤ人を、できる限り買い取った。それなのに、あなたがたはまた自分の同胞を売ろうとしている。彼らはまた私たちに売られなければならなくなる。」すると彼らは黙ってしまい、一言も言えなかった。

ネヘミヤは非常に腹を立てました。これは、間違っただけでしょうか？いいえ、聖い怒りです。正しい怒りです。それは、弱者に対しての虐げを見ての怒りであり、そして弱者を虐げることへの怒りを発する神ご自身の怒りでもあります。しかし、ネヘミヤは、その後、十分に考えました。その怒りに任せて行動に移さなかったのです。このバランスが彼の敬虔さを表しています。思い出すのは、使徒パウロです。アテネにいた時に、「使 17:16 さて、パウロはアテネで二人を待っていたが、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えた。」とあります。しかし、彼はアレオパゴスの丘で語る時は、とても同情に溢れたものでした。「17:22 パウロは、アレオパゴスの中央に立って言った。「アテネの人たち。あなたがたは、あらゆる点で宗教心にあつい方々だと、私は見ております。(17:22)」彼は、偶像礼拝を糾弾するのではなく、彼らのしていることを理解している、分かっていると彼らの宗教心を受け止めるるところから始めたのです。

そこでネヘミヤは、感情を移入させずに、淡々と、肅々と、この罪に対峙しました。まず、呼び出したのは代表者らや主立った者たちです。その後で大集会を開きます。この順番は大事ですね、イエス様も誰かが罪を犯したら、まず本人のところに行ってその兄弟を責めなさい、と言われました。悔い改めなければ、二人、三人の証人によって話し、それでも悔い改めなければ、会衆の中で罪を責めます。そして繰り返しますが、「責める」というのは糾弾する、あるいは吊し上げることではありません。罪をそのまま本人に告げることであり、自分もその罪を犯しえることを恐れながら告げるのです(ガラテヤ 6:1 参照)。そして、その内容は、担保にして金貸しをしているということです。これは、聞いているユダヤ人たちは、はっきりとモーセの律法に違反したことであることを気づくものでした。そしてネヘミヤは、「自分の同胞たち」と言いましたが、一つの民なのだ、私たちは心一つにしているのだ、ということです。

9 私は続けた。「あなたがたのしていることは良くない。あなたがたは、私たちの敵である異邦の民から侮辱を受けることなく、私たちの神を恐れつつ歩むべきではないか。10 私も、私の親類の者も、私の配下の若い者たちも、彼らに金や穀物を貸してやったが、私たちはその負債を帳消し

にしよう。11 だから、あなたがたも今日、彼らの畑、ぶどう畑、オリーブ畑、家、それに、あなたがたが彼らに貸していた金や穀物、新しいぶどう酒、油などの利息分を彼らに返してやりなさい。」

ネヘミヤが、この工事を開始させる時に、彼らに言った言葉は、「2:17…さあ、エルサレムの城壁を築き直し、もうこれ以上、屈辱を受けないようにしよう。」というものでした。けれども、ユダヤ人が同じユダヤ人を苦しめる姿は、間違いなく敵のそしりとなります。私たちの間に誰かのわがままな行為で葛藤が生じていれば、「これなら教会も所詮、世と同じね」というそしりを受けかねません。そして、「私たちの神を恐れつつ歩むべきではないか」とネヘミヤが言っているのは、誰も見ていなくとも、神に対しては申し開きしなければいけないのだ、ということです。

そして、ネヘミヤはまず、自分が見本を示めました。負債を自分がまず帳消しにしています。指導するとは、自分が初めに出ていき、それから他の人々が付いていくことができる人です。

そして、ここでの「利息分」という言葉は、直訳は「百分の一」です。月に対して一パーセントの利率ということなので、年率に換算すると十二パーセントであります。この利息分も含めて帳消しにしない、と命じています。私たちは、赦しということはこの原則を当てはめるべきでしょう。英語で赦すという言葉と帳消しにするという言葉は、聖書では同じ forgive が使われています。人が罪を犯すことは、ちょうど相手に借金を作ってしまったことと同じです。赦すことは、その負債を帳消しにすることです。「コロ 3:13 互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。」

12 すると彼らは、「私たちは返します。彼らから何も要求しません。私たちはあなたの言われるとおりにします」と言った。そこで私は祭司たちを呼んで、この約束を実行する誓いを立てさせた。13 私はまた、衣の裾を振って言った。「この約束を果たさない者はだれでも、神がこのように、その人の家から、また、その人の勤労の実から振り落としてくださいますように。このように振り落とされて、無一文になりますように。」すると全会衆は、「アーメン」と言って【主】をほめた。こうして民はこの約束を実行した。

彼らは応答しました。けれどもネヘミヤは、それだけで終わらせませんでした。応答したことを、祭司たちの前で誓わせたのです。つまり、自分自身に対して念じたのではなく、ネヘミヤや他の人々の前で誓ったのではなく、主に対して約束を果たすということです。ですから、これは非常に霊的な重大問題であり、申し開きをしなければいけないという類いのものになりました。

3A 仕える指導者 14-19

14 また、私がユダの地の総督として任命された日から、すなわち、アルタクセルクセス王の第二十年から第三十二年までの十二年間、私も私の親類も総督としての手当てを受けなかった。

彼が総督であることに注目してください。ペルシアの各地方において、総督にまさる権限は与えられていません。ネヘミヤは、ユダの地において王からの権限をすべて任されていました。ネヘミヤには、権力があり、権威があり、位があり、そして富もありました。しかし、彼はその権限を城壁の工事のためにすべて用い、具体的にはユダヤ人が工事をするために負担を軽減するところに用いたのです。キリスト者にはそれぞれ、自由と力が与えられています。自分が自由であれば、それだけ力も与えられ、それを自分のために用いるならば、他の人にその重荷を背負わせることとなります。「ガラ 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」その自由と力を、愛によって人々に仕えることによって、人々に益をもたらします。

まず、総督としての手当てを受けませんでした。そして親類も受けていません。しばしば政治指導者の中で、その家族や親族で汚職があったという事件が起こりますね。ですから、ネヘミヤは本人だけでなく親類にさえも、当然受けるべき給与を受けないようにさせました。時に、主の奉仕者は、主を愛する愛のゆえに、自分に与えられた権利も降ろすこともします。これは、あくまでも愛のゆえ、自主的に行うことであり、例えば福音を語る人は当然、無給であるべきであると考え、そのままにすることは誤っています。しかし、愛による犠牲は福音の働きを進ませます。

イエス様ご自身がそのような方でした。「ピリ 2:6-7 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、」イエス様が、神としての御姿に固執しなかったから、だから人である私たちと一体となることができ、そして私たちが神の御力とその富を受けることができます。使徒ヨハネも、パトモス島に流刑されていた時に、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、(黙示 1:9)」と言いました。師匠ではなく兄弟になったから、そして共にイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかったから、諸教会はイエスの中で動いていくことができました。

15 私の前任の総督たちは民の負担を重くし、銀四十シェケルのほかにパンとぶどう酒を民から取り立てた。しかも、彼らに仕える若い者たちは民にいばりちらした。しかし、私は神を恐れて、そのようなことはしなかった。16 また、私はこの城壁の工事に力を注ぎ、私たちは農地を買わなかった。私の配下の若い者たちはみな工事に集まっていた。

ネヘミヤは、前任の総督たちのように、自分たちの食べるもののために税を課すこともできました。しかし、それは民がさらに苦しめられることを意味します。しかしネヘミヤは、「神を恐れて」そのようなことはしなかった、とあります。自分が人々を裁く権限が与えられているけれども、神がその人々に対して行っていることにしたがって自分自身を裁く権限があることを知っていたので、控

えたのです。そこに知恵があります。「【主】を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟ることである。(箴言 9:10)」とあります。

この前、ある方から、自分が苦しみの中にいる時に、周囲の人が、「こうすればいいじゃない」「ああすればいいじゃない」という助言を軽々しく与えるのに腹が立ち、がっかりすることを話しておられました。私は、「祈って、祈って、そして神から知恵が与えられないと、僕は畏れ多くて助言はできない」と答えました。助言を与えるのは、当たり前にあります。その力が与えられているからこそ、かえって神を恐れて控えるのです。聖書ではそれを「慎み」と言います。「Ⅱテモ 1:7 神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。」力には愛があり、また慎みもあります。あることを行なう力もあり、その自由もあるのです。それは、なんら神に対して罪になりません。しかし、そのことで愛する兄弟がつまづくのであれば、それを敢えて行いません。兄弟をつまずかせてしまう、というところに神への恐れが生じて、慎みが生まれるのです。

そして、ネヘミヤは総督ですから、土地の一区画ぐらい買いたいものです。けれども、自分に仕える若い者たちが工事をしているのだから、城壁の工事に専念しました。つまり、自分の権威を「行動」で示しました。「私の言うことを行ないなさい。」ではなく、「私の行なうことを、行いなさい。」と示したのです。しばしば、私たちは、「私たちを見るのではなく、イエス様を見て。」ということを行います。確かにその通りです。人を見ていればつまづきます。希望はイエス様だけにあります。しかし、これを自分自身が使うと、どこかで逃げていると誰かが言いました。正しいことを語るだけ語って、実際にそれを見せていないのです。使徒たちは違いました。ペテロとヨハネは、足なえの男に大胆にも、「私たちを見なさい。」と言いました(使徒 3:6)。使徒パウロも言いました。「Ⅰコリ 11:1 私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」

17 ユダヤ人と代表者たち百五十人、また私たちの周囲の国々から来る者が、私の食卓に着いていた。18 そのため、一日に牛一頭、選り抜きの羊六頭が料理され、私のためには何羽かの鳥が料理された。それに、十日ごとに、あらゆる種類のぶどう酒がたくさん用意された。それでも私は、この民に重い負担がかかっていたので、総督としての手当を要求しなかった。

総督ですから、ユダヤ人たちの代表者だけでなく、周りの国々の人々も来ます。そして食事を出すのですが、それはそれは、盛大なものでした。牛一頭、羊六頭が毎日出されます。ぶどう酒も高級なものがずらりと並びます。けれども、総督の手当てを要求しませんでした。ここにある権威は、「仕えて、与える権威」です。民の重い労役にさらに重荷を負わせたくないと思い、自分で担ったのです。イエス様ご自身は、ご自分の命をも捧げるほどの奉仕をされました。「マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

弱い人の弱さを担い、犠牲を払うところに愛の究極の姿が現れています。「ロマ 15:1-3 私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではありません。私たちは一人ひとり、霊的な成長のため、益となることを図って隣人を喜ばせるべきです。キリストもご自分を喜ばせることはなさいませんでした。むしろ、「あなたを嘲る者たちの嘲りが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりです。」主は、罪の負い目を持っている人々のために、その罪をご自身の上に担われました。私たちは、自分自身が犠牲を払っていることが人の目に付かなくても、主が見ておられることを知っているので主張することなく、満足できるのです。

19 私の神よ。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくんでください。

最後が大事です。これらの良い行いをしたネヘミヤは、主に対して報いを求めていることです。人に対して行っているのですが、究極的には主に対して行っています。そして、主からの報いを期待することによって、人と人の関係ではなく、主と自分との関係になります。「マタ 6:3-4 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」